

パーソナリティの形成と文化に就いて

本 庄 良 邦

Yoshikuni HonzYO

(I)

一般に生物は、自己のもつ生命力の発動にともなつて differentiate し成長してゆくのであるが、その分化成長が必ず夫々にインテグレートされた統一体としてまとまつてゐる。全人としての人 (whole-being) は亦夫々に他であり得ない所の固有のものを有つてゐる。即ち各個体が独特の integration をもつのであるからその人独特の経験が始めてその人を教育すると云う Hopins の所謂 "代理不可能の原理" がうなづかれるのである。かかる固有の統一体としての人間像をパーソナリティと云うのであるが、これは知的情意的な個々独特の行動様式を表わすのであつて、時により事情によつてかなり変転した姿で表われる力動的過程である。而して単に心理学的に偏するものではなくて、特にパーソナリティの形成過程を論ずる場合は社会と個人との力動的相互関係をみつめねばならない。即ち個人は社会集団の成員であるが故に既に文化所属を決定せられ、その中で育てられ学習してゆくからそこに比較的共通なパーソナリティが形成せられるのである。そこで各個人を集団として見た場合、亦他の集団とは異なる特性を見出す事が出来るであらう。

さて子供が親から受けついで来た最も大きなものは生きようとする力即ち生命力であるが、この生命力は今後大人として社会的な人間として生きてゆく上に必要な適応 (adaptation) の力を備えている。而して肉体的成長につれて "分化した欲望" をもつからそれにつれて自己と環境との適応をうまく処理せねばならない。

即ち個人は環境との適応を常に抵抗少くしようとし、average な人たるべくその社会生活に慣れようとするのである。それは種々の色合いをもつた環境の刺戟に応じて種々の色をつけて顕現して来る一種の潜勢力 (potentiality) をもっているからなのである。生命力をもつた個体が飽くまで外界と適応してゆかねばならないから、欲求は Physiological な need と同時に social need を有たねばならない。と云うのは個体は如何なる場合でも決して集団的な生活を抜きにしては考え得ないからである。ところが社会性が複雑多様化し社会そのものの連帯性が強固になればなる程、集団のメカニズムによつて生理的欲求は制約をうけるのである。この様な欲求が生理的社会的なものとして発現し顕現してゆく過程に於いてその人の行動の型 (behavior pattern) が、実はその人の生れると同時に入り込む社会が既にもつている "伝統としての文化" によつて色づけられて来るのである。つまり個体に本具する生命としての potentiality 以上に我々が本能と呼ぶべき一定の色合いをもつたものがあるのではなく、欲求として働く個体内の動因 (drive) に従つて社会的自然的环境に適応してゆく過程にその個体特有の行動の系列があらわれる。之が所謂パーソナリティと云われるものなのである。

(II)

K.Lewin が個人差を次の如き三つの要素から説明しているが⁽¹⁰⁾、即ち、

- (1) Structure of the total System.
 - ④ Degree of Differentiation.
 - ⑤ Type of Structure.
- (2) Material and State of the Systems.
 - ④ Differences in materials.
 - ⑤ State of Tension of the Systems.
- (3) Differences in Content of meaning of the Systems.

以上の分析は勿論トポロギカルなものであり、その三つの複合が個人の差をつくりだすと考えられる。此の「全体系の構造」と「その体系の素材及び状態」とは形式的な差であり、つまり人種や階級を超えて普遍的な構造と構成の基礎をなしているとい得るのである。然るに(3)の『その体系に於ける意味深い内容』と云うのは、全くその個人の置かれた場つまり環境乃至シチュエーション、云い換えれば時間的(歴史的)空間的(地理的)・社会的背景に応じて与えられるものである。これをレヴィンは次の如く説明している。『たとえ2人の個人の構造及び質的特性(the material Properties)が同じであつても、その体系に対応する内容は異なるであろう。そしてそれがパーソナリティの決定的な心理学的差異を構成するのである。たとえ彼等の構造や質的特性が殆んど同じであつてもロシアの草原に於ける4才児とサンフランシスコの支那街の4才児とは彼等の目標や理想の内容や生活の異つた色々な分野の意味を異にする故に重大な個人的差異を示すであろう。これらの内容の差は、質的特性や構造的な面(structural plan)よりも高度に歴史的影響に依存するのである』(Lewin; op. cit., P.209. 点線筆者)と述べている。

つまり日本に生れた子供は日本の文化に同化さるべき運命をもつており、亦日本に生れたアメリカ人が日本の東北地方のある村で日本人達だけの手で育てられるとき彼が東北人として生長する事は明かな事である。

これは「児童の主要な眼界・態度・理想・興味・目的等が児童の生れ出てくる全環境的背景によつて凡て条件づけられて、その中に於て形成せられ」⁽¹³⁾てゆくが故に、まさしく「児童は文化の複合体(a cultural complex)の中に生きている」(Olsen, Ibid.P.30)と云い得るのである。即ち日本にはそれなりの独自の生活様式(the way of living), 政治経済組織・理想道德等々をもつており、亦東北地方のある村は他のそれとは異なる集団的特色をもつ culture base をもつており、これは全体的環境的な背景が、つまり歴史的につくられた社会的な patterned behavior である文化が、その中で生きている子供に強く作用しこれら子供達が学習してゆくからなのである。云い換えれば子供達が communication によつて絶えざる成長を遂げ、共同経験(shared experience)に参加してゆく事によつて、⁽¹¹⁾ 第二の自然としての習慣の体系・行動様式・認識構造等を学びとつてゆくからなのである。

従つて、個性化と同時に社会化をすすめねばならない教育が、習慣化と云う言葉でもわかる如く常に保守的性格をもつのもその為であり、この "routine habit" の上に知性としての習慣、即ち創造的習慣を打ち立ててゆかねばならない。そこに教育の進路が見出し得られると思うのである。

さて、パーソナリティ形成に文化的要因が如何に重要な役割を果すかを強調したのが M. Mead であるが、彼は現代の社会ではなく未開社会の研究によつてそれを説明している。

(註) 勿論、ミードは、すべて文化的要因によつてパーソナリティが形成せられると云つていてのではない。

亦、未開社会に於ける文化とパーソナリティをそのまま現代の社会に於けるそれにあてはめる場合にも、色々問題がある。

即ちニューギニアのマヌス族では母が漁業に従事し父親が家に留まり幼児の世話をする。この子供等に人形を与えてみると女児よりも男児の方が人形遊びに興味をもつたと云う。これは女性に母性本能があると考えられていたのが、女児の母親への identification であり imitation であつたわけである。即ちマヌスの男児が人形遊びに興味をもつたのは父親への同一化を絶えず行いつつあつたからである。故に母性的行動は決して本能的なものではなくてやはり文化基盤から生ずるものなのである。子供の擬人化の傾向にしても子供に本来的にあるのではなくてこれも寧ろ社会から与えられるものであり、子供の心理的発達はやはり文化構造に依つて規定せられているのである。⁽⁵⁾ 亦、性の差によるパーソナリティの相異即ち男性的パーソナリティ、女性的パーソナリティも決して生理的なものではなく、チャムブリ族で見られる如く我々が云う男性的パーソナリティと女性的パーソナリティとが全く逆になつている。ここでは婦人が経済的活動をつかさどり男子は女子に依存するのである。従つてこの女性は積極的で支配的なパーソナリティをもち男性は消極的で依存的でやさしいパーソナリティをもつている。この社会で男子が積極的・独立的であれば社会的不適応者とされるのである。亦アラペツシュ・ムンドォグモール両種族では、両性間に性差がみられず、前者では両性とも温和で非攻撃的パーソナリティ(我々の云う女性的)をもち後者は両性とも乱暴で攻撃的パーソナリティを持つている。この事は性の差によるパーソナリティが生物学的要因に基くのではなくて主に文化的に形成せられてゆく事を示すものである。⁽⁷⁾ 亦ミードは青年期の反抗現象、不適応現象をとりあげ、これも身体的原因から説明さるべきではなくてやはり文化構造のうちにその原因を求めべきであると説いている。即ち我々の社会では青年期になれば急激なる身体的発達変化により社会的不適応現象を起すものが多く現れるのであるが、サモアに於ける青年は此の現象がみられない。これはサモアでは文化内容が単純で青年期に於ても選択に苦しむ事が少なく亦、性に対する抑圧もない。而もサモアは一大連合家族になつているから子供達に対して愛情が片寄らない。かかる社会で徐々に文化を獲得してゆくから、サモアの青年には不適応がみられないと云うのである⁽⁶⁾。

(III)

斯くの如き Mead の研究にみられる如くパーソナリティの形成は、文化環境の性格によつて規定せられる処多く、パーソナリティが生物学的乃至心理学的概念であるよりは寧ろ一種の社会学的概念であると解され得るのである。特にパーソナリティの形成過程を論ずる場合は有機体の反作用を誘発する環境自体の特性即ち環境としての文化類型 (culture pattern) をみつめねばならない。

云い換えれば文化が如何にしてパーソナリティ形成の条件となり得るかを究明しなければならぬのである。

さて個人は社会によつて規定せられつつ文化の保持者となるのであるが、同時に文化の創造者・操縦者ともなり文化の変化に積極的な役割を果すのである。だからパーソナリティ形成に於ける文化的要因をみんとする場合には文化と個人との動的な相互関係、就中個人を中心として文化が如何に個人に影響を及ぼすかをみなければならぬ。一般に個人が文化々(enculturate)せられ社会化(socialize)されると云う事は、個人が文化的学習(cultural conditioning)を行つて適応してゆく事に外ならないが、これは個人が一定の歴史的社会の cultural pressure によつて形を与えられ、この圧力の下で個人がその社会における普通人へと形成せられてゆくと考えられるのである。即ち社会に於ける cultural expectation が個人を一定の文化のタイプに形成してゆくのであり文化期待が『パーソナリティを形成する圧力』(personality moulding pressure)となるのである。ここに文化の個人に対する形成的関係が成立するのである。云い換えれば文化は個人に対して社会的に承認せられたパーソナリティ(approved personality)即ち標準人(average man)たらん事を要求する。つまり集団的文化の統合である文化型は価値体系であるからしてその文化に属する各個人をして標準人たらん事を求める。これが文化期待であり文化拘束であつて、文化がパーソナリティ形成の力をもつ所以である。此の文化的圧力で以て文化所属を決定する。而してこの様な文化的圧力期待に個人は、集団内の社会的身分「social status」or 地位「position」と役割「social role」の網状組織に於て出くわすのである。(豊沢登, 日本教育社会学会, 昭26)

斯く、幼時より個人は社会的訓練を施され、その要求に最小限合致しなければ社会的に生きてゆけないのであり、社会的方式(social mode)を身につけなければ仲間はずれにされたり、人に笑われたりする。その社会の期待にそむくものは悪人であるからして既存の文化に従わなければ社会的に処罰を受ける。試みに仕来りたる社会方式は、社会の巨大なハズミ車であると云い得るのである。

故に、ミードの云う如く自我そのものは本来的に生れつき存するのではなく、社会的経験と活動に於て發生するものであり、パーソナリティは本質的に社会的構造であり、社会的経験の中に生れるものなのである。ここにオルポートの云う「パーソナリティとは凡そ社会的事実(social fact)である。」⁹⁾と云う事がうなづかれ、亦レヴィンの先に述べた個人差の場合の“素材”も“意味深い内容”も此の社会的事実にあたと云えよう。

かかる社会的事実としてのパーソナリティは、幼少より文化的学習を通じて夫々パーソナリティを完成させてゆくのであるから夫々異つた average man が形成されるのも当然の事である。例えば前述の非攻撃的パーソナリティをもつアラベッシュ族では、子供はすべての人から愛され安定した感情をもつが、攻撃的パーソナリティをもつムンドウグモール族では個人間の争が絶えず、子供に対する愛情は温くない。亦クワキツトルでは誇大妄想的な人間が、ドブ島では猜疑心の強い人間が標準人であり、バリ島人のパーソナリティは無感動な分裂症を呈している。これはバリ島では幼少より生活上のきびしい約束を守るべく訓練せられ対人関係も事務的に処理せられる。亦幼児に母親

が乳を与えるように見せかけて与えずに却ける。

即ち絶えず要求中絶が起り、情緒が抑えられるからである。(M. Mead, *The Balinese Character*, 1942) (Boston, ^{フラストレーション})
此の様に異つた文化には夫々異つた標準人があり、我々から見れば異常である事が彼等にとつては
何ら異常ではないこととなるのである。

かかる標準人から亦、理想的人間も考えることが出来るのである。

此の average man は、文化の拘束に従い文化に適応した人であるが、亦、その社会の文化に適
応できない atypical な人間 (型はずれ) も生れてくるのである。これは一定文化内に於ける文化
への mal-adjustment なのであつて、文化的圧力への個人のレジスタンスに外ならないのである。
そこで、同じ文化期待の圧力の下で average man と atypical man とが、何故に生ずるかを考
えてみる必要があるのである。

一般に二つの文化が接触する場合、両者に何等かの変容をもたらすものであるが、此の文化型の
変化の過程に於いては再組織への苦しみがあり、ここに marginal man が出現してくるのである
が、此の文化構造そのものに大変革が加えられ、再統合されることを acculturation (文化移植)
と呼んでいるのであつて、ある文化に所属する個人にもこの acculturation と同じことが起るので
ある。即ち、以前に学習された文化と新しいそれとが矛盾対立する場合、自己のもつ習慣の体系、
彼の思想と行動を支配している価値体系、彼の常識の背後にある認識構造、等々の再組織をせまら
れるのである。所謂、彼のパーソナリティの変容を行わなければならなくなるのである。即ち、以
前の文化から再組織された文化へと文化所属をかえる事を意味するのである。まさに、教育的形成
過程とは、個人に於けるかかる再組織の事実を云うのであつて、機能的には acculturation のプ
ロセスであると云い得るのである。

〔文 献〕

- (1) R. LINTON, *The ultural background of personality*. 1945.
- (2) R. BENEDICT, *Patterns of Culture*.
- (3) K. YOUNG, *Social psychology*. 1944.
- (4) R. F. BUTTS, *A cultural History of Education*.
- (5) M. MEAD, *Growing up in New Guinea*. 1930.
- (6) " *Coming of Age in Samoa*. 1928.
- (7) " *Sex and Temperament in three primitive societies*. 1935.
- (8) I. GILLIN, *Cultural Sociology*. 1948.
- (9) F. H. ALLPORT, *Social psychology*. 1924.
- (10) K. LEWIN, *Dynamic Theory of Personality*. 1935. (chap. VII)
- (11) I. DEWEY, *Democracy and Education*. chap. 1~4.
- (12) " *Human Nature and Conduct*.
- (13) E. G. OLSEN and others, *School and Community*.
- (14) F. J. BROWN *Educational Sociology*.
- (15) 南 博 著, 社会心理学. 昭25.
- (16) 三森定男著, 人類学概論
- (17) 棚瀬襄爾著, 文化人類学.
- (18) ゴールデン・ワイザー 米林訳, 文化人類学. 昭24.
- (19) 日本教育社会学会編, 「教育社会学の課題」. 二関氏論文.
- (20) 教育社会学研究会編, 教育社会学通論. 豊沢氏論文.
- (21) 林克也著, 人類と環境の歴史的形成. 昭24.
- (22) 本庄良邦, 九州教育学会, 「教育原理の心理学的考察」昭26.